

今から「未来の僕」にできること

高松市立川東小学校 六年 葛籠 光さん
ついで ひかる

「もう朝か。」
今朝も母が体をゆすって起こしてくれた。朝が苦手な僕は、目覚まし時計を二つセットしているが、時々聞こえないことがある。生後すぐの検査で難聴と診断されたからだ。小学校二年生で支援学級に入級するまで、聞き取りづらくて困ったことがよくあった。そんな僕をいつも側で支えてくれたのは、家族だ。また、先生や友だちも僕の特性を理解し、苦手なことをそばでサポートしてくれた。

僕の母はとても喜怒哀楽があり、僕や妹ととびっきりの笑顔と、時に厳しい態度で接してくれる。それに僕のバスケットボールチームの友だちからも慕われる、名物母さんだ。その母が僕の進路についてある日、話をしてくれた。それは「中学校で通常学級で勉強をするのか、それとも今と同じように、支援学級へ入級して勉強するのか」ということだった。

それから僕の挑戦は始まった。それは、僕の将来のためにも通常学級で勉強をして、自分の力をしっかり付けたいと考えたからだ。

最初に取り組んだのは、国語の話し合い活動を交流学級で行うことだ。今までは先生と二人で話し合い、個人個人の意見しかなかった。しかし、学級のみなどで話し合うことは深まりがあった。僕も積極的に手を挙げ、自分の考えを述べたり聞き取った意見に対して考えをつないだりした。算数でも電子黒板に映される図形の移動や考え方を視覚的に友だちとじっくり考え、論議することができた。

昨年の夏休み、単身赴任で京都にいた父と一緒に数々のお寺へお参りに回った。そこでいつも、耳がよくなりましますよつと。「と願った。両親も同じ思いだったそうだ。父はぼくの進路について、「ぼくに任せる。」と話してくれた。それだけに、父がぼくを信用してくれていると感じた。父は父なりに、言葉だけではなく、態度や行動など、いろいろな経験を通して僕に伝えてくれることがある。時には剣山へ登り、自然の偉大さを肌で感じながら、将来のことを考える機会を与えてくれた。

家族の思いもあり、願いが叶いつつある。何と、病院の先生から、「聞こえがよくなっている。」という検査結果をもらったのだ。今にも跳び上がりそうな気持ちだった。このことで、僕の未来への道がより一層光り輝いた。

ぼくは将来、伯父のような機械に関する仕事に就きたいと考えている。なぜなら、僕の今使っている補聴器は汗やしょげきに弱いので改善していきたいという思いがあるからだ。バスケットボールをしている時は外しているが、やはりコーチの話を聞く際は自分から側に行ったり友だちに聞いて確認したりしている。また、僕と同じように難聴の子どもたちが補聴器を付けることが特別ではなく、日常の生活の一部として当たり前を受け入れてくれる社会にしたい。僕のこの経験が役立てられる社会になるよう「未来の僕」は走り続けたい。

愛してくれてありがとう

高松市立庵治中学校 三年 岡田 琴美さん
おかだ ことみ

父は仕事熱心な人でした。ですがそれよりも大切にしてくれたのが私達子供でした。父の仕事は漁師です。毎日朝は早いし、出荷の時期には、朝早くに漁に出て、また夜中に漁に出ることもあり、バツシャの時期には一日中漁に出ています。少ない人数で毎日漁に出ている父達には滅多に休みはありません。そんな大変な仕事をしている父ですが、いつも自分のことは言わずに私達ばかりを気にしてくれました。私は父に何度も「迎えに来て」と頼みました。眠れる時間が少ない父なのに嫌な顔一つせず「いいよ！何時？」と返ってくれました。何度か仕事のある日に頼んだこともあります。その時は「明日仕事やけん行けんかもしれんけどなんとかするわ！」と、仕事の休みをずらしてくれ、次の日には「行けるよ！」と返ってくれました。それだけではなく、夏休みには毎日「お父さん急いで帰ってきたよ。お昼ごはん食べに行こう。」と急いで仕事から帰ってきてくれて、毎日お昼ごはんを食べに連れていってくれました。休日には「ご行こう！」と言ってくれ、お出かけもしました。父がいなくなった今、当たり前前に感じていた父の優しさや愛情がすごく特別なものだと思ってきました。父は私をほめてくれました。料理をしていると「何作りよん？うわすごいなあ！」と毎回言ってくれました。そして父に作った料理をあげるといつも食べ終わった写真を撮って「おいしかったよ。ごちそうさん。」とメールを送ってくれました。行事がある時、その後に必ず「どうだった。」と聞いてくれました。修学旅行や、最後の総体の「行ってきます。」「たーだいま。」「楽しかったよ。」「新記録出たよ。」「そんな私の言葉に対して、「よかったね。」と返してくれる父の姿はなく、大きな魚を持って嬉しそうに父の写真に向かって話しかける毎日となりました。テスト期間には毎日夜食を作ってくれる父もいなくてやる気のないテスト期間が一段と辛く感じます。

毎日大変な仕事をがんばっている父に「お疲れ様」の一言も言えなかった自分、「ありがとう」「ごめんね」が言えなかった自分が情けなく悔しいです。亡くなった今、できることは数少なく、毎日の出来事を話したり、毎日たくさん食べていたようにお供えするご飯を大盛りにしたりとすることくらいしかできません。もっとたくさん話しておけばよかった、もっといろいろなことをしてあげたかったと毎日たくさん後悔をします。

十四年間で、父から教えてもらったことはたくさんあります。父とは十四年間しか一緒にいられたけど、父との毎日はかけがえのない大切な思い出です。これからは私が大切な人を愛し、自分を犠牲にしても助け父のようになり、父が望む私になれるように、毎日を大切に父の分まで笑顔で生きていきます。お父さん、ありがとう。ごめんね。